日本福祉大学福祉社会開発研究所『日本福祉大学研究紀要－現代と文化』
第101号　1999年8月

英語の声を作る：インナー・スピーチとマルチメディア

－the 'real world' is to a large extent unconsciously built up on the language habit－

小　泉　純　一

大学の英語教育で何を教えるのかについて，否定的な意見から肯定的な発言，文法や訳読の重要性を説くものから，パソコンを活用し，コミュニカティヴな方法こそ二十一世紀に向けて必要であるというものまで，まさに百花繚乱ともいえる状況である．これは必ずしも好意的な見解ではない．様々な努力がそれぞれの場で行われている事は評価するが，英語教育の核に何を据えるべきかが見えにくいのではないだろうか．英語教育の大きな柱とすべきものは，英語を読む声を学生に獲得させることではないかと私は考える．その視点から今までの英語教育のあり方を分析し，英語を読む声を身につけるとはどのようなことであるのかを明らかにしたい．また，英語を読む声を身につけるためにどのようにマルチメディア教材が利用できるかについて最後に触れることにする．

新入生に英語の最初のクラスで，英語を学習してきて面白かった事はあったかと尋ねると，ほとんどの学生は「特にない」と答える．英語を学ぶ目的はと尋ねると，数名の学生だけは「将来必要になるから」ともっともらしい答えを言う．続いて，英語が好きな人と聞くとほとんどの学生が「苦手です」と反応する．学生が英語に対してどのようなイメージを持っているかといえば，高校までの受験英語，学校英語が彼らのなかに作り上げてきたものといえるだろう．高校や予備校までの受験英語や学校英語では，試験の得点が悪かったり，成績評価が思った程でなければ，ほとんどの生徒が英語に対して苦手意識を持ち，できることなら避けて通りたいと思ってしまう．しかしそれは受験英語や学校英語に対してであって，それが学生にとっての英語すべてではない．

英語に対する苦手意識を持っているとはいえ，学生の多くは英語に対する関心は高いと思う．端的に言えば，洋画の台詞を英語のまま聞き取れるようになりたいとか，様々な国の人と英語を使って話せるようになりたいと感じている学生は少なくない．受験英語や学校英語に対して「使える」英語，「生きた」英語と言われるものが学生の欲望を刺激する英語のもう一つの側面である．英会話を目的とした英語学校がそのような欲望をくすぐるものである事は言うまでもない．

ここで指摘しておきたかった事は「英語」，あるいは「英語学習」の多義性である．英文を日本語に翻訳できること，英語の語彙やイディオムを増やす事，文法を身につける事，英語の文章を作れる事，それを喋る事ができる事，英語を聞き取って理解する事．技能としてみれば，聞く，

話す，読む，書くの四技能だが，質的には違いがある．受験や試験のためにやらされてきた高校までの「お勉強」としての英語と，学生にとって未知ではあるが欲望をくすぐる「生きた」英語．多少なりとも英語を身につけることに憧れを持っていれば，未知の「生きた」英語に対する思いは膨らんでいく事だろう．

更に問題を複雑にするのは，この二つの英語とはまったく関係のない別物ではなく，同じ英語のとらえ方の違いに過ぎない事だ．高校までの英語では英語を日本語の文脈に置き換えて理解する事を基本とし，「生きた」英語を理解しようとすれば，英語のまま聞き理解しなくてはならない．確かにこれは大きな認識の違いなのだが，高校までに学ぶ語彙，イディオム，文法の知識なくして，「生きた」英語を理解できるかと言われれば，それらも役に立っているはずなのだ．文化大革命のときに学生であった中国人の友人は，学校では英語については何も習ったことはなかった．それと比べれば中学，高校で六年間英語を学べば，一定の英語力はついているのだ．但しだからといって，高校までの英語の学び方がすべてではない．高校までの英語に足りなかったものを補ってやる事が大学の英語の使命ではないだろうか．

高校時代までに学生たちは英語に対する一つのイメージを作り上げてきている．そのイメージの基幹をなしているのは，受験英語，学校英語であることは言うまでもない．彼らにとっての英語のイメージとはただ一つの正解とそこからのおびただしい逸脱と表現することもできる．英語が試験のために存在するなら，英語とは自分の英語力を図る基準に矮小化され，英語を通して何かを感じ取ったり，自分を表現したり，相手の主張や気持ちを理解する手段とはなりえない．そもそも言葉とはお互いが意思疎通するために作られたものである．外国語の学習においても，教師と学生がどれだけ意思疎通がはかれるかが，言葉本来のあり方から言って，重要視されるべきではないだろうか．

大学における英語教育は高校までの英語学習の単なる延長線上にあると考えるべきではない．大学入試を前提とする高校までの英語学習は，技能の修得に重きが置かれている．大学を志望する高校生なら英語の勉強がつらくても受験のためだと納得できる．そのような高校生にとって英語学習の動機付けは入試に合格するという一点に集約できる．大学ではそのような動機付けはありえない．もっとも，大学の英語のクラスの定期試験に合格するために英語を勉強するのだと合理化する学生も少なくないとは思うが，試験に合格するための道具としてしか英語をとらえることができないとしたら，この発想の貧困さを指摘しなくてはならないし，そのようにしか学生に認識させられない教える側の力量も問われなくてはならないだろう．

大学がエリート教育であった時代であれば大学における英語教育の目的は専門課程で英語で書かれた文献を読む力をつけることに求められた．現在もひとにぎりの学生にはそのような力をつけさせる必要がある．大学院に進学し，その道の専門家なり研究者になろうとする学生はわずかではあっても存在する．

読み書きのためではない，コミュニケーションのための英語力を必要とする学生たちもいる．高校や大学の在学中に語学研修などで海外経験をする学生の数は増加してきている．あるいは将

来国際的な場で活躍したいと考えている学生も少なくない．このようなコミュニケーションの手段としての英語を必要としてきた学生に対して，書き言葉としての英語を中心に学んできた教員が提供できるものは少ないのではないかと考えられてきた．あるいは，もっと実用的な英語を教えるべきだとの主張もあることはいうまでもない．

しかし，大学教育がますます大衆教育と化している現状において，全ての学生に上で述べたような英語の素養をつけさせることは無意味である．多くの学生はエリート教育としての英語学習に対する動機付けを持てないし，英語を使えなくても生きていけるのだから．何故英語を学習しなくてはならないのかという問いに対するアプリオリな答えは現在の大学の英語教育には存在しないと考えるべきではないだろうか．むしろ，なぜ英語を学ばなくてはならないのかと考えること自体に大きな意味がある．

> 名付けて“Motivational Language Learning (MLL)”最近筆者が考えている外国語学習法である．日常生活でコミュニケーションの道具として外国語を使うことがない日本では，外国語の使用が教室だけに限定されがちなので，コミュニケーション能力の育成については教室の枠を越えた外国語学習への動機づけこそが，正否の鍵を握っていると言える．だとすれば日本では何よりもまず「動機」を中心に外国語学習法を構築するのが，最も現実的ではないだろうか[1]．

松本氏はここでコミュニケーション能力の育成についてはと条件を付けているが，大学における英語教育のあり方という点で「動機」を中心にした外国語学習法の必要性は認識されるべきだ．

言葉とは毎日を生きる上での術であり，糧であると考えるなら，それはただの道具以上のものである．英語を身につけることは，お花やお茶などの芸事を習うこととは異なっている．英語力をつけると言う場合，相手の言うことが分からなくても，自分の最低限の必要を相手に伝えられるレベルから，英語を話すネイティヴと同じように感じることができるレベルまで，様々にとらえられてきた．また別な角度から見れば言葉とは日常生活で使われるものであるのだから，日常の現実や必要性において捉えるべきものだろう．言葉をしゃべることはその言葉を母国語とする人にとっては，特別な行為ではない．外国語を身につけようとする時に忘れてならないことの一つとして，言葉を支えている精神活動をあげることができる．何かを感じとること，そしてそれについて考えること，さらにそれを言語化することは一つの精神活動から生じている．同一の現象が異なった様相を呈しているのだ．実際に言葉を発したり，書いたりする場合，こうした言語活動を促す切っ掛けや原因がある．外の世界に対するなんらかの思いや感じるものがあって，それらが言葉を求めるのだ．言語活動が起きる寸前に生起している精神活動と切り離して，言葉の使い方だけを教えることは効果的ではない．

1）松本青也「マルチメディア情報：マルチメディアによるMLL」『英語教育』1995，7月号，80ページ．

英語を母国語としない学生に英語を学ぶ動機を植え付けられるかどうかは，彼等が関心を持っているものと英語をどのような回路で結び付けられるかにかかっている．学生の関心は様々であるので，その結果は多様なものとなるだろう．例えば，映画に関心があるものであれば，インターネットのホームページから情報を得てきたり，映画の特定の場面のディクテーションなどを行うことが考えられる．洋楽に関しても同じことが考えられる．さらに英字新聞や雑誌を活用する方法もある．

学ぶ動機を中心とする英語教育は，高校までの英語学習の延長線上にあるものではない．高校までの英語教育で身につけるものは文法などに関する基本的な知識である．たとえていうなら，各パーツの名前や機能を学生は学習することになる．動機を中心とする英語教育では，そのパーツを自分の関心に応じてどのように使いこなせるかがカギになる．試験のために必要な知識として英語をとらえるのではなく，自分の生活や世界を広げたり豊かにする資源として認識しなおす必要がある．

教える側にとっても例えば成績の評価などについて見直しを迫られることになるだろう．

教育目標には二つの種類がある．ひとつは，たとえば算数で繰り上がりを含む2桁のたし算を行うことができるといった，学習の結果，ある技能を身につけるというものである．これは到達度評価の対象である．英語教育も従来この分類で考えられてきた．もうひとつは音楽や美術のように，音楽を聞いたり，絵を描いたりする経験そのものに意味があるものである．音楽の学習の一環としてベートーベンの「田園」を聞くというのは，音楽を聞くという経験そのものに意味がある．第1楽章の主題がどのように展開されるかとかベートーベンの生まれた年を覚えるということが目的ではない．このように教育には経験することそのものを学習の目標とするものがある[2)]．

到達度評価の対象であった英語に対する固定概念をくずすために，朝尾氏は音楽や絵画などの経験を例示している．もっとも文学作品の鑑賞やテクスト分析をする場合に行われていることは，言葉を通して経験するものの意味の追求であるから，必ずしも朝尾氏の主張は目新しいものではない．しかし，文法や語法などのように覚えたかどうか評価しやすいものを教育の中軸にすえる代わりに，言葉を通して経験すること自体を評価しようという点で注目に値する．

では具体的にどのような評価をすればよいのだろうか．評価はしなくていいのだ，従来のような意味あいにおいては．英語に関心を持たせ，学ぶ動機付けを行うクラスと，英語を学ぶ意欲のある学生に実際に英語力をつけさせるクラスをめりはりをつけて行う必要がある．中学高校大学と英語を学んでも使い物にならないという批判がある一方で，英語の教師の側からはその間の時

2）朝尾幸次郎「英語教育ネットワーク通信：ネットワークは英語教育を変えるか」『英語教育』1995，9月号，89ページ．

間数を総計し，到底その程度の時間数では英語をものにすることは不可能だとの反論もある．大学の場合にも一・二年次に二コマずつではたかが知れているというのが実感ではないだろうか．そこでどれだけ英語に対して関心を持つことができて，クラス以外に学生本人がどれだけ英語の習得に時間を割くことができるかが英語力の向上に関係してくる．動機付けを主として行うクラスでは，学生がどれだけ英語と自分の間に接点を作ろうとしたかどうかが評価の対象になるだろう．

動機付けを教育目標とするには，英語学習が外から押し付けられたものではなく，学生の内在的な欲求から生じるものでなくてはならない．英語力をつける近道について，松本氏は次のように主張している．

> 英語を思考の道具として使いながら，楽しいこと，面白いことをなるべくたくさんすることにつきる．そんなことは百も承知でいながら，今までの日本の英語教育が実用的な英語力を育てられなかった最大の原因は，英語を毎日の生活の中で思考の道具として楽しく面白く使えるような環境がなかったことであろう．ところがそうした状況を今マルチメディアが一変しようとしている[3)]．

学生が楽しさや面白さを感じ，好奇心を持てる素材を教材とするには，学生自身がそのような教材を探す方が効率的であろう．学生全員が一律の教材を消化するのではなく，関心の持てるものを学生が探し出し，それをクラスで発表させればよい．

松本氏の上の引用でもう一つのポイントは，思考の道具として英語を使う環境の問題である．松本氏がいう環境とは実際に英語を使わなくてはならない場面のことをいっている．英文法で英語の各パーツの機能や働きを学ぶだけでは，英語を身につけることはできない．実際の場面で，読み書き，聞き話すことで徐々に英語力は身につくことになる．英語を使う実際の場面としてまずあげられるのは読むことであろう．これについては訳読と直読直解の問題としてこの後で取り上げることにする．聞き話すことについては，国際化の時代とはいえ，日常的に英語を使って話し合う機会がまだまだ少ない．日本にいる限り日常生活の中で英語力をいかす場面は限られてきた．そこに出現したのがインターネットの世界である．

多くの大学では教職員だけでなく学生も自由にインターネットを利用できる環境が整ってきている．利用条件や環境は様々であろうが，自由に情報にアクセスできるという点では大差無いのではないだろう．そこで待ち受けているのが英語力の問題である．英文を読むことに抵抗がなければ，インターネットの世界は加速度をつけて広がっていく．海外のサイトから情報を得たり，英文のメールを発信することはもちろん，自分のホームページの英語版を作ったなら海外からのメールが届く可能性も高い．しかもインターネットの利用は特別なことではなく，自分の関心の

3) 松本青也「マルチメディア情報：秀作 CD-ROM」『英語教育』1996，3月号，80ページ．

持てるテーマについて，自分のペースで行うことができる日常生活の一場面なのだ．そこでは英語は所謂勉強の枠組みから踏み出し，英語を手段として使って，どんな情報が手にできるのか，どのようにコミュニケーションが行なえるかを学生が自由に模索することができる．

ここまでで述べてきたことは，高校までに学生が作り上げてきた英語へのイメージを大学の英語教育でどのようにしたら塗りかえられるか，そして自ら進んで学ぶ意欲を持たせるために，動機付けを中心に据えた英語教育のあり方が効果があるのではないかということであった．ここからはその具体的な道筋や考え方について展開することにするが，高校までの英語の学び方をどれだけ相対化できるかという課題は必ずしも動機付けの問題と密着したものではない．しかし，それを相対化できるかどうかが，学生の英語の見方やとらえ方を変えるのだから，必然的に動機付けの問題と関連することになると考えられる．

キーワードとなるのは，高校までに生徒が曝されてくる訳読の考え方の対極にある直読直解あるいはフレーズ・リーディングである．さらにフレーズ・リーディングを行う上で，英語を発声する声の重要性を指摘し，英語を読む声を作ることが英語習得のベースにあることを示し，それを作るためにはマルチメディアの教材や辞書が有効であること，それらをどのように教室で利用することができるのかについてまとめることにする．

日本人の外国理解の方法は過去に遡ってみると翻訳が中心にあった．政治的文化的に後進国であった日本にとってそれは宿命とも言える．古代には中国が範とすべき国であり，明治以降は西欧諸国に追いつくことが急務となった．日本と外国との関係の一つは，お手本とすべき国と後れた国という図式であらわすことができる．

中国の文化が日本に流入しはじめた頃，音博士と文字博士という二種類の学者が存在したと言う．音博士は中国語を自由に話し，中国人と自由にコミュニケーションをすることができた．一方文字博士は中国語を話すことはできないが，漢文を日本語の読み下し文にして理解することができた．異文化間の接触が始まった頃は音博士に対する評価は高かったが，白文を日本語の読み下し文に置き換える技が確立するにつれ，文字博士の力が音博士のそれを凌駕するようになった．中国人との直接の接触の少ない日本にいる限り日本人同志で中国語をしゃべる必要はない．中国語の文献についても，漢文を日本語化して理解することができるようになった．日本人にとっての翻訳の原点はここにある．文字博士は中国人と話し合うことはできないが，筆談ならすることができる．しかし筆談においても日本語の文法を介在させて漢文を作るのであるから，それは日本語化した漢文なのである．

上で述べたことを二つの観点でまとめると，一つは日本人は中国語を中国語のまま理解したのではなく，日本語の文法に置き換えて理解したこと．もう一つは，中国語を書き言葉として理解しようとしたと言えるだろう．これが日本人が異文化と接触する際の一つのモデルとなっている．翻訳の発想とは，異文化をそのまま理解するのではなく，異文化を母国の文化や考え方の文脈に置き換えて理解しようとするものだ．当然消化しきれないものは，得体の知れない概念のまま取り残されたり，誤解が生じたり，無視されたりするものも存在する．

江戸末期から西欧文明が流入した時も同じことが生じている．英語に関しても，象徴的な言い方をすると音から文字へ，耳から目へと理解の仕方が変化している．いくつか例をあげるなら，「船にのる」を「ゴボーノシッポ」，「今何時ですか」を「ホッタイモイジルナ」と理解した日本人は，アルファベットを読むことはできなかったが，英語を聞き取る耳を持っていた．「カタン糸」や「メリケン粉」についても同様である．英語を読めない日本人のなかで，英語でコミュニケーションをとらなくてはならない者たちにとっては，耳から入る英語がすべてであるような時期があったのだろう．

もちろん英語は日常的なコミュニケーションの場だけではなく，外国との条約の文書や英語の文献など書き言葉の場でも必要であった．英語を読む必要に迫られた日本人の中には，それを漢文と同じように理解しようとした者もいた．漢文の返り点などを参考にして，英文の主語や動詞，目的語の下に番号をふって，その番号順に直訳すれば一応翻訳文が完成するという方法も考えだされた．我々にはそれを笑うことはできない．英文を和訳することは，英語の発想を日本語の発想に置き換えることであるのだから，結局同じことを行っているからだ．

異文化を母国の文化に置き換えて理解すること，外国語を日本語に翻訳できることは大切なことだ．しかしその力とコミュニケーション能力は全く別物である．いくら英語を勉強しても英語が話せるようになれないではないかと言う主張は，文法や翻訳を中心にする限り，現実の教育のあり方とはスレ違うばかりだろう．コミュニケーション能力で必要なのは異文化を異文化のまま引き受ける力だからだ．

言葉によって，感覚や思考の働き方が異なることはいうまでもない．日本語は聴覚より視覚に依存する言葉である．同音異義語の多さから考えても，耳で聞いても分からないが，書かれた文を見て，使われている漢字を読めば一目瞭然ということは多い．一方英語は，相対的に視覚より聴覚に依存する言葉である．漢字による単語や熟語はその単位で意味をつくり出す．一方英語は，語順によって文章関係が決まり，単語を音声化しなければ意味が伝わってこない．たとえば日本語のリズムは音節中心だが，英語ではストレスがリズムの中心になる．ということはストレスやイントネーションを英文を読んだり発話する際再現できるかどうかが英語力と関係してくる．この問題についてこれ以上科学的な証明をここで行うことはできないが，日本語と英語の一つの傾向としては理解できると思う．そもそも耳で聞いて理解するのに向いた英語を，書き言葉として理解しようとしたことにも，英語を異文化として理解する上での落とし穴があったというべきなのかも知れない．

翻訳という考え方の対極に，直読直解の考え方がある．ここでいう直読直解とは，翻訳を介在させずに英文を書いてある語順のまま理解するフレーズ・リーディングのことを意味している．外国語を習得するには，外国語で考えられるようになればよいといわれるが，直読直解をすることは外国語で考えられるようになる第一歩である．文章構造が複雑になって文章が長くなったり，書かれている内容が抽象的で分かりにくくなれば英文のまま理解することは難しくなるが，文章構造が簡単な英文であれば英文の語順のまま読んで理解することはそれほど難しいことではない．

理解しやすい英文を多く読むことで，英語を読みこなす声を作ることが可能になる．

英文を直読直解をするために必要なものは，英語で考える声である．人間はものを考える時は必ず言葉を使っている．直接声に出して発声することはなくても，頭の中では様々な言葉が浮かんでは消え，思わず独り言を言う場合もある．英語で考える声とは，日常生活において常に行われている言語活動のことを意図している．言語学の専門用語ではこれはinner speech（内語現象）と呼ばれている．

> inner speech（内語現象）発声という概念は，ふつう音声化を伴うことが条件となっているが，言語心理学的には，話すこと・聞くこと・読むことのいずれも聴覚像を媒介とするもので，聞く・読むの心的行為も常に声の伴わない発声が行われているものであって，これを心的発声といい，この潜在的な言語活動を内語現象という[4]．

赤ん坊を例にするなら，こどもは一定の期間周りの人間がしゃべる言葉を一方的に聞いて，少しずつ言葉をしゃべることができるようになる．しゃべることができるようになっても，こどものしゃべりかたは大人のしゃべりかたとはちがって，舌ったらずな場合が多い．母国語に関しても，人間は言葉にさらされることで，内語現象を開始し，言葉の原形的なものを心理のプロセスでつくり出し，それに基づいて発声をすることになる．

外国語を話すことを目標にするのなら，内語現象の必要性を学生に意識させる必要がある．ネイティブと同じようなレベルでの内語現象を行うことは困難だし，不可能だが，外国語にアプローチするモデルとして，翻訳して理解するのではなく，外国語の語順のまま分かろうとする方法が存在することを学生に伝えることには意義がある．内語現象を可能にするためには，聞くことが重要な作業となる．言語感覚は聴覚から作らなくてはならないからだ．

英語の内語現象について，日本人が英語の聞き取りを難しく感じる理由の一つとして，日本語と英語の発声や音の違いをあげなくてはならない．まず指摘できるのは，日本語は単語の語尾が必ず母音で終わる開音節であるのに，英語の場合は語尾が子音で終わる閉音節が存在すること．その結果日本人は英語を日本語化して発音する一般的傾向がある．つまり，閉音節であるべきところを，日本語の言語感覚に即して，開音節化してしまう．もちろんその方がいいやすいからだ．また英語では子音が連続して発音されることもあるが，日本語の音ではこれも発声できない．

日本語に本来存在しない音を強引に日本語で表記したために混乱が生じた場合もある．たとえば「チーム」や「ミルク」はカタカナで表記され日本語化したため，英文を読んでいる際に出てくれば，カタカナ読みしてしまうだろうが，ネイティヴが話すのを耳で聞いたなら，聞き取ることはまず不可能である．これについては，英語の言葉の音を，日本語の音に翻訳し直したための悲劇である．日本人の学生にとって，英語の正しい発音でいう限り，言葉と物は繋がることはな

4）小川芳男『英語教授法辞典』三省堂，1991，277ページ．

いが，カタカナでいえば繋がるのだ．

三点目にあげられるのは，日本語と英語のリズムの違いである．日本語は音節と音節の長さが一定で，高低によってアクセントを示す傾向がある．一方英語は音節の長さは一定でなく，強勢の置かれる部分は強く長くなり，ない部分は早く短く発声される．英語を声に出して読む場合は，発声が強くなる部分を一定の間隔で作ってやらなくてはならない．

上で述べた以外の音現象の違いには，別な言葉同志が語尾の子音と語頭の母音を介在させることで結合してしまう連音現象，単語の語尾が子音でそれに続く語の頭に子音がある場合，前の語の語尾の子音が脱落する現象，子音が三つ連続した場合まん中の子音が消失する現象，隣り合う語が融合して別な発音になる現象などがあげられる．日本語にも音が変化する現象は存在するが，英語の場合の方が音の変化の度合いは大きい．日本語であれば，書かれている通りに発音すれば問題はないのだが，英語の場合は書かれている通りに発音してはいけない場合の方が多い．書き言葉で表記されている英文は，実際に声に出される時には，もう一段崩れた形で発声されるからだ．それらについては，それぞれの音現象がどのような場合に起きるのかを理解していなければ，聞き取ることもできないし，発音をすることも不可能だ．

日本人が英語を声に出して読む場合，上で述べたような音に対する意識の違いのため，日本語を発声するやり方で英語を発声する傾向がある．つまり英語を発声する声が作られてきていないのだ．その理由としては，耳から英語を聴きとる条件が不十分であったこと，外国語について発声の違いに関する教育が行われてこなかったこと，書き言葉としての英語の側面に教育の重点が置かれてきたことがあげられる．先に述べたフレーズ・リーディングによって直読直解を行うためには，その言葉での内語現象を行う必要があるのだから，その国の言葉に即した声で発声ができることが理想である．

英語教育における音声機器の利用は，レコードやテープレコーダによって行われはじめた．中学や高校の教科書の英文を吹き込んだレコードやテープなどは六十年代から販売されていたのではないだろうか．しかし残念なことに，使用方法の限界などの理由で，それほど活用されなかったのでないかと思う．音は時間的にどんどん流れていくものであるし，聴く作業は受け身的な活動なので，問題意識をしっかり持たないと，聞き流すだけに終わる嫌いがある．その点 LL 機器を活用し，学生が自分の声に出す作業を組み入れる場合は一定の効果がある．

映像が伴う視聴覚教材を利用する方法もある．聴覚からだけでなく，視覚からも情報が得られる方が学生は親近感を感じる．特に映画の一場面を教材とする場合，いわゆる英語のテキストを使用した時と学生の反応は違っている．どちらかというと無味乾燥な文章と，見ているだけで内容に引き込まれるような場面を描いたシナリオとでは，学生の関心の持ち方は異なったものになる．学生が文学のテキストに対して反応しなくなり，英語のテキストも文学離れをおこしてきたが，学生が感動を求めていることに変わりはないと思う．事実として問題を複雑にしているのは，学生が英語に対する偏見を作ってきていること，教員にとって今の学生がリアリティーを感じられる素材をさがし出すことが簡単ではないことが考えられる．

視聴覚教材の活用に関しては，クローズド・キャプションの存在を忘れることはできない．アメリカ合衆国で販売されているヴィデオには，聴覚障害者に配慮し，英語の字幕（キャプション）が打ち込んである．ヴィデオ・プレーヤーにキャプション・ディコーダーをかませると，画面に英語の字幕が浮かび出てくる．フォーレターワードを穏当な表現に変えたり，長めの表現を簡単な言い回しに変えることがないわけではないが，大体登場人物がしゃべっている言葉を文字で再現している．画面の字幕を見て英語を聴くことで書き言葉と話し言葉の関係を確認することができる．またくり返し見ることによって，英文の字幕を見た瞬間にそれを内語で発声するシャドウイングの訓練を行い，英語の声の基礎を作ることもできる．アメリカで市販されているヴィデオには必ずキャプションは入っていると考えていい．日本で販売されているヴィデオについては，ワーナーブラザーズから出ているヴィデオには全てキャプションが入っているが，それ以外のメーカーから出ているものには入っていない．キャプションが入っている場合には，ヴィデオの背表紙の部分にクローズド・キャプションつきであることを示すマークがついている．また数は限られているが，最初から画面に英語の字幕が表示されている製品も作られている．

英語の声を作るという点では，詩の朗読のカセット・テープやコンパクト・ディスク，ヴィデオなども活用できるだろう．書き言葉は時間や空間を越えて知識や思想，文化を伝えることを可能にしたが，話し言葉の持つエネルギーや音感，言葉自体の手触りのようなものを伝えることは不可能であった．音声を記録する方法の向上によって，文学研究のありかたにも変更が迫られることになるだろう．必然的に人間が出す音の力に敏感にならなくてはならない．耳に響く言葉の力をもっと意識すべきであるし，耳で聴いて認識するプロセスの分析が行われなくてはならない．天国に入れるかどうかは，詩の朗読ができるかどうかにかかっているという英語のことわざには，案外英語という言葉の特徴が暗示されているのではないだろうか．

辞書のコンパクト・ディスク化もどんどん進んでいる．特に強調したいのは，単語の発音をしてくれる機能についてである．この機能がついているもので発売が早かったものに，Softkey 社から1994年に発売された *The American Heritage Talking Dictionary* がある．これは1992年に活字で出版された『アメリカン・ヘリッテジ』第三版がコンパクト・ディスク化されたものである．ソフトを立ち上げたのち検索したい言葉を枠内に打ち込み，マークをクリックすると発音を聴くことができる．パソコンのソフトで問題なのは，ソフトの立ち上がりの速さだが，発売から年数はたつが立ち上がりの速さ，使いでの良さでは評価できる．

日本の出版社から発売されたもので音声読み上げの機能がついているものには大修館書店の『ジーニアス英和・和英辞典CDロム版』がある．但し，すべての語を読み上げるわけではなく，一部の語だけにしか音声読み上げ機能がついていない．最近発売されたものでは『ランダムハウス英語辞典CDロム版』があるが，全ての語に音声読み上げ機能がついているようだ．英語を習い始めたばかりの生徒や音声記号の理解が不十分な学生は，単語の発音を聞くことにより，耳で聞き取る力をつけることができるし，英語本来の発音になれることができる．発音や発声に関する学習指導は，中学から高校へと進むにつれて減少しがちだが，あらゆる段階において英語の音

の問題には配慮されるべきである．教員が教室でそれらのソフトを利用するだけでなく，学生が自由にそれらのソフトを活用できる条件を整える必要がある．

今まで述べてきたようなマルチメディア教材を教室で利用する可能性について最後にふれておく．視聴覚教材に対応した教室を備えることが最善であることはいうまでもない．この場合学生一人一人が自分の力量にあったソフトを活用することを考えるなら，学生一人にパソコンが一台割り当てられることがのぞましい．LL 教室の設備更新にあわせて，パソコンを利用した形態に移行する必要がある．特に録音機能付きのソフトを学生が使えるなら，英語の声を作るという点からも，一定の効果が期待できる．

普通の教室でこうした教材を利用する方法はかなり限られてくる．パソコンが一台あるだけなら，どのような教材があり，どのように利用できるかを学生にデモンストレーションすることはできるだろう．パソコンが常備されていなくても，教室にパソコンと連結可能なモニターが設置されているのなら，ポータブルパソコンを持参することで，同じようにデモンストレーションを行うことができる．しかしパソコンの音声を利用するには，授業のたびにポータブルパソコンを持参し，教室にあるモニターに繋ぐだけでは不十分である．サウンド機能の点でいうなら，一定数以上の学生にパソコンの発する音が聞こえるためには外部スピーカーと接続することが望ましい．いずれにせよ，デモンストレーション的な利用方法が基本となるであろうから，学生の動機付けを促すことを中心にすべきだろう．

今までの日本の英語教育の中で英語を聞くという作業は，他の三技能にくらべて力が注がれてこなかった．その理由としては，英語を聞く環境に制約があること，学習の中心が書き言葉に置かれてきたこと等がある．しかし科学技術の進歩により，日本人が英語を聞き取る上での弱点をおぎなってくれるような機器が次々とあらわれてきた．巻き戻しに時間がかかるテープとは違い，CD やパソコンのソフトはピンポイントで必要な情報をとりだすことができる．このようなメディアが英語教育のあり方に変革をもたらすことは言うまでもない．しかし，実際の教室でそれらの機器を使える環境は充分には整っていない．この環境を整えられるかどうかは，これからの英語教育への姿勢や取り組み方を示すものである．大学における英語教育で何を目標にしているのかを，学生に対しても社会に対しても明らかにする必要がある．

外国語の修得には，その言葉の言語感覚を身につけることが必要である．たとえばそれは，その言葉の背後にある考え方や感じ方であるし，単語が喚起するイメージ，文章のリズムや音の響き，そして言葉の持つ手触りのようなものまで含み込んでいる．母国語を身につけたように，外国語も身につけるのが理想ではないだろうか．この言語感覚の身につけ方については，到達点というものはない．そのときどきの感覚でどのように言葉と向き合えるかが問題なのだ．それを身につける手がかりとして，フレーズ・リーディングによるインナー・スピーチが有効であることはこれまで述べた通りである．

従来の日本の教育の一つのモデルは習字に象徴されるように思えてならない．簡単に言ってしまえば，お手本があってそれにどれだけ近付けるかどうかが学習のポイントとなるようなあり方

だ．英語のクラスで訳読を中軸にした場合これと同じようなことが発生しがちになる．学生は教員に対して唯一の正解として「訳」を求める．しかし，英文を日本語に翻訳することは，一つの英文がおかれた文脈の中でそれがどのような意味をもつかを解釈する行為であるから，解釈の仕方で様々な翻訳が生み出されるものなのだ．一つの正解を求めがちな学生にこのことを理解させられるなら，それは大きな成果である．それが理解できたなら学生は教員に訳を求めることはしなくなり，自分自身の声で文を読み，自分なりの解釈をしようとするだろう．学生は書き言葉のテクストと自分の声で対話することで，自分なりの解釈を手にすることになる．

言葉とはコミュニケーションのための道具であると言う場合，書かれたものと自分の間にコミュニケーションがなくてはならないし，自分に問いかけるというコミュニケーションも存在する．そのいずれにおいても，インナー・スピーチは機能している．大学における英語教育とは，言葉の力とはどのようなものであるのか，どのように言葉が働くのかを明らかにするものでもあると思う．言い換えるなら言葉によるコミュニケーションとはどのようなものであるのかを考えるものであるだろう．コミュニケーションのための言葉について学ぶクラスにおいて，まず必要なものは学生と教員との間のコミュニケーションである．それをつくるには，学生の側の「英語」に対する偏見を打ち崩さなくてはならないし，教員の側も学生が必要としているものをあらためて考える必要があるだろう．

附　記

この論文は1996年度の日本福祉大学課題研究の助成を得て行われた研究に基づくものです．この場を借りて関係諸氏に感謝いたします．

参考資料

1) *The American Heritage Talking Dictionary*, Softkey, 1994.
2) 小西友七（編），『CD-ROM版：ジーニアス英和・和英辞典』，大修館書店，1997.
3) 『CD-ROM版：ランダムハウス英語辞典』，三省堂，1999.